

<目的> 比較的面積の小さい装飾的ドレープとしてカウル・ネックをとりあげ、布の力学特性やカウル・ネックのサイズが、視覚による官能評価に及ぼす影響については既に検討を行った¹⁾。本研究では、やや面積の大きい、下半身を包む衣服の装飾ドレープとして、前面にドレープをいれたドレープド・スカートに着目し、布の力学特性とドレープの形態および視覚官能値との関係を明らかにするとともに、カウル・ネックとの比較を行う。

<方法> 新合繊、シルクを含む16種類の試料布（カウル・ネック実験と同一試料）を用いてドレープド・スカートのサンプルを製作した。静的な官能評価では各サンプルをJIS婦人9号サイズの人台に着装させた状態でのドレープについて、動的評価では実際に9号サイズの人体に着装させ、動的なドレープ形態の視覚による評価を一定距離の歩行時に行った。被験者は20代の女性で、静的評価46名、動的評価32名とし、官能評価は20組の形容語対についてSD法による5段階尺度とした。

<結果> 視覚官能検査によって得られた各サンプルの評価値と、布の基本力学特性およびこれらを組み合わせた力学量パラメータとを関連づけた結果、布の単位面積当たりの重さおよび布の曲げに関する力学量である曲げ弾性ポテンシャルと官能値との間に高い正の相関が認められた。すなわち、曲げ硬く、弾性に富み、ある程度の重さをもった布は、深い溝を形成し、ひだが明確になるため、ドレープド・スカートとして良いと評価されるという、カウル・ネックの場合と同様の結果が得られた。また、これらの力学特性値を用いて精度よく視覚官能値を予測できることを確認した。

¹⁾ 三木幹子, 綾田雅子, 丹羽雅子(1997)日本家政学会第49回大会研究発表要旨集, 233